歴史地震
第36号 (2021) 264頁

［講演要旨］

1854 年伊賀上野地震の際の福井の液状化記事

加納靖之*（東京大学地震研究所／地震火山史料連携研究機構）

§1. はじめに

1854 年伊賀上野地震（(1854 年 7 月 9 日，安政元年六月一五日)）では，福井で液状化が発生したと解釈できる史料がある。宇佐美・他（2013）では福井での震度を「E（大地震）」と判定しており，液状化の発生については考慮していないようにみえる．中村（1999）は「いくつかの史料によると，伊賀上野の地震の震源断層からかなり離れた岡山市あるいは福井市でも，液状化の被害があったことが記述されている」[1] としつつも，記述の例を上げた上で，福井の記述については「地震の日付が異なることと，家の倒潰があったとするのは信憑性に疑問が残る．史料名からすると伝聞をまとめて本にしたもののようである．」として福井での液状化の発生について留保している．

この報告では 1854 年伊賀上野地震の際の福井の液状化記事について再検討する．

§2. 関係する史料の再検討

既刊の地震史料集（主として，『日本地震史料』『新収日本地震史料第 5 巻別巻 3』）から福井に関する記録を抽出した．可能な限りもとの史資料（デジタルアーカイブや刊本も含む）を確認した．抽出した史料記述を概観すると，液状化の発生に関する記述は中村（1999）の指摘したような伝聞情報が多く，大半がかわら版やそこから書き写されたものである．また，福井城下の日記では，伊賀上野地震前後の市中のようすが分かるものがある．

伊賀上野地震に関するかわら版については，北原（1999）による「小野コレクション」のまとめを参考にした．北原（1999）は 10 点のかわら版を 7 種類に分類したが，そのうち分類「A」「C」「E」には福井の被害の記述があり，「A」「E」には「田地泥海になる」という記述があること，さらに，「越前福井については，一三日 [2] の同地での大火情報だけのものがみられる」ことを指摘している．各地の地震史料に記述されている伊賀上野地震の際の福井の記述は，これらの分類中のかわら版に一致する．かわら版そのものの場合と，そこから書き写された写本と推定される場合とがある．

福井城下の年譜や記録類では，地震の際に液状化が発生したと解釈できるような記述はない．同月一三日に発生した大火（「塩町大火」）についての記述と比べると，地震についての記述は簡略になっている．『山口家譜』では「六月十四日暁八ツ時過大地震、夫ゟ追々少々ツヽゆり申候、京都諸国とも同様」とあり，江戸での記録である『内外見聞日録』では塩町大火については飛脚によって情報がもたらされたことが書かれているが，地震や液状化についての情報が届いたとは書かれていない．

現地の年譜などに記述されず，伝聞情報での記述が充実していることからは，福井での液状化の発生は疑わしいと考えるのがよさそうである．

§3. 議論

震源など地震学的な情報を得る目的において，かわら版にあるようは伝聞情報について，史料あるいは記述の信頼性が低いとして排除してしまうことは簡単である．排除しない場合は，ほかの史料との照合や比較検討が必要となる．他地域の被害状況や，地震学的の知見に基づいた震源や地盤構造を仮定して推定できる震度分布なども参考となるだろう．

地震学的な震央推定という関心を離れると，いくつかの観点がありえる．伊賀上野地震では，震源近傍をはじめとして各地で液状化被害がみられた．かわら版の編集過程で異なる地域の情報が混信してしまったことも考えられ，かわら版に書かれた情報の編集過程を知る手掛りになるのではないだろうか．また，かわら版は目をひき，わかりやすいイメージがあるためか，展示などの題材となることが多い．描かれた状況がどの程度事実を反映しているのかを検討し提示していくことは，過去の災害についての正確な情報の提供していくために有益であると考えられる．

参考文献

加納靖之，2018，1854 年伊賀上野地震の際に伏見で発生した局所的な液状化被害地点の検討，自然災害科学，37，205-217.

北原糸子，1999，小野コレクション伊賀上野地震のかわら版について，歴史地震，15，132-137.

中村操，1999，安政伊賀上野の地震（1854/7/9）の液状化被害，歴史地震，15，117-124.

宇佐美・他，2013，日本被害地震総覧 599-2012，東京大学出版会，724 pp.

[1] 中村（1999）が岡山市での液状化としているのは，実際には京都市伏見区で発生したものと考えるのが妥当である［加納（2018）］．

[2] 北原（1999）では算用数字（「13日」）．